

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月18日現在

機関番号：32614

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820049

研究課題名（和文） 横光利一自筆資料の調査翻刻による研究基盤形成

研究課題名（英文） Base formation of research by the result which was investigated about the data in Riichi Yokomitsu's own hand, and was reprinted

研究代表者

井上 明芳（INOUE AKIYOSHI）

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：90614264

研究成果の概要（和文）：本研究は、横光家ならびに山形県鶴岡市所蔵の横光利一自筆資料について調査し、目録の作成とすべての資料にわたり翻刻を行った。翻刻については、原資料保存の観点からデジタル画像化したものを用いて行い、抹消痕なども可能な限り判読した。それによって横光の執筆過程を明らかにすることを目的としている。その成果を公開することによって横光利一研究の生成論的な分野を補うことで、基礎的な寄与を果たしている。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the data in Riichi Yokomitsu's own hand possessed by The Yokomitsus and Tsuruoka-shi, Yamagata, and created the list. Moreover, it reprinted over all the data. About the reprint, from a viewpoint of source material preservation, it carried out using the digital-imageized data, and deciphered erasion marks etc. as much as possible. It aims at clarifying the writing process of Yokomitsu by it. And by compensating the generation theory field of Riichi Yokomitsu research, a fundamental contribution is achieved by exhibiting the result.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：文学全般・横光利一・自筆資料・翻刻・調査

1. 研究開始当初の背景

本研究は横光利一自筆資料について、研究課題の採択前より横光家から依頼を受けて個人的に調査研究を行ってきたことに基づいている。しかし個人的な研究では調査は遅々としており、公表できた成果はわずかでしかなかった。また、調査途中で山形県鶴岡市に自筆資料が寄託されることになり、その整理過程で作成した寄託目録も研究資料とする

には不足面が否めなかった。そのため、本研究課題に応募し、鶴岡市に寄託された自筆資料と横光家に残された自筆資料とを合わせた目録作成とそれらすべての翻刻とを行い、公開することで、基礎的な寄与を目指した。それによって横光研究では立ち後れている生成論的な領域のさらなる開拓と発展が可能になり、新視点の横光研究が期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、山形県鶴岡市に寄託された横光利一の自筆資料、ならびに横光家が所蔵している自筆資料を調査し、翻刻を行い、横光利一研究における作品の生成過程研究の基礎的な基盤形成である。鶴岡市が所蔵している横光自筆資料については極めて貴重なものであるため、同市によって寄託目録は出されたものの、全面公開には至っておらず、全容を知ることはできない。また、横光家に至っては、調査がほとんど未着手ゆえに、その存在すら知られていない。そこで、横光家ならびに鶴岡市の全面的な協力のもと、自筆原稿をはじめ、書翰や手帳類などを調査、分類した上で、翻刻し、その成果を公開する。また、それらを一覧できるように目録も作成する。その際、鶴岡市によって刊行された目録の修正も行う。これによって、貴重な横光利一の自筆資料の保護も可能になるため、文化財として後々まで保存が可能になるであろう。

3. 研究の方法

本研究は、横光利一の貴重な自筆資料を扱うため、原則的に次の方法で行った。

(1)横光家ならびに山形県鶴岡市所蔵の自筆資料をすべて、デジタル撮影を行う。その際研究協力者の助力を得る。

(2)デジタル撮影を行う際、自筆資料の数量や状態なども調査し、目録を作成する。

(3)すでに鶴岡市に寄託されている分については鶴岡市に赴き、同市責任者の管理のもと、デジタル撮影と調査を入念に行う。横光家所蔵分については、同家のご厚意のもと、原資料を借り受け、大学の研究室にてデジタル撮影と調査を行う。

(4)すべての撮影が終了した段階で、まず目録の作成を行う。その際現行の横光利一全集との対照を行い、横光研究における利便性をはかる。

(5)目録作成と同時に、デジタル化した画像を用いて、翻刻を行う。翻刻の方法はすでに行ってきた記号類を用いて、これまでに公開している翻刻資料にあわせ、発展性を考慮して行う。

(6)デジタル化した画像の閲覧はタブレット機器を用い、研究協力者の助力を得て、翻刻を行う。

①翻刻に関しては、デジタル化した画像では

判読不可能な箇所がある。その際には原資料にあたる必要があるため、慎重に行い、原資料を損なわないように細心の注意を払う。

②横光家所蔵分については、研究室に貸与いただいているため、研究室内で原資料にあたる。

③鶴岡市所蔵分に関しては、長期休暇などを利用して同市に赴き、同市の責任者のもと、閲覧させてもらう。そのためには、事前に判読不可能な箇所のリストアップなどを行い、効率よく翻刻ができるようにする。

(7)以上の作業を完成年度の2012年度中頃までに終わらせ、目録の確認や体裁の確認などの編集に入る。また、横光自筆資料に関して解説を作成する。

(8)仕上がった結果を本研究の成果として公開する。公開に関しては、鶴岡市と横光家の所有権や公開権を遵守し、両者と話し合いの上、成果資料集を刊行する。

以上の方法にしたがって、本研究を進めていく。進め方としては以下の通りである。

(1)2011年度は横光家ならびに鶴岡市がそれぞれ所蔵している資料の全容を把握するために、デジタル撮影の作業を進めながら、目録作成を完了する。

①鶴岡市所蔵分については、同市がすでにフィルム撮影を行っていたため、ネガの貸与を受け、スキャンする。その際同市が刊行している目録と対照の上、その分類番号にしたがって分類する。なお、不明分がある場合は同市に問い合わせ、原資料の確認、デジタル撮影を依頼する。

②横光家所蔵分については、原資料を用いて、デジタル撮影を行う。分類は鶴岡市刊行の目録の分類番号に従う。

③以上の結果を踏まえ、横光家、鶴岡市所蔵のそれぞれの資料について分類番号を付し、統一した目録を作成する。その際、鶴岡市刊行の目録を刷新し、完成させる。

(2)目録の分類に従い、デジタル化した画像を用いて、翻刻を行う。横光の代表作である「旅愁」草稿の一部が含まれているため、それらも重点的に翻刻する。翻刻は加筆訂正箇所だけではなく、抹消箇所についても行う。

(3)鶴岡市所蔵分の資料については、長期休暇などを利用して調査に赴く。また、次年度

に継続することも考慮し、判読不可能と予想される箇所についても、同市に赴いた際デジタル撮影をするなどして予測して対応する。

(4) 2012年度は本研究の完成年度であるため、昨年度からの作業を継続し、鋭意翻刻作業を進める。進行ならびに方法は昨年度同様である。以上の作業は2012年度前半、までに終了すること目的とする。

(5) 2012年度後半は、目録について翻刻成果を踏まえた再確認を行い、よりわかりやすいものにする。また、翻刻の記号等の用い方の統一もはかり、でき得る限り、横光の執筆過程が明確になるように試みる。

(6) 以上の成果をDTPソフトを使用して、編集する。同時に、横光家と鶴岡市と公開について話し合い、所有権や公開権などを確認し、遵守する。

4. 研究成果

本研究によって得られた成果は、横光利一研究における生成論的な面に寄与できたことである。横光研究では、その革新的な文学理論や新感覚派としての斬新な表現をめぐる研究が盛んであり、生成論的な側面はほとんどなされていない。その点では、本研究は自筆資料を翻刻することで大きく前進させており、さらに他の自筆資料の調査の公開の可能性を引き出すとともに、本研究の翻刻資料の検討によって生成論的な研究の新局面が開かれる可能性ももっている。具体的には次の通りである。

(1) 小説「旅愁」は横光文学の代表作と位置づけられながらも、横光自身によって書き換えられたため、実際はテキスト本文の確定もいまだなされていないのが現状である。それに対して「旅愁」草稿の翻刻は、「旅愁」の生成の一端を示すことができている。とりわけ、現行の全集所収の「旅愁」や文庫版のそれでは読むことができない内容が草稿には含まれており、「旅愁」生成の過程において、読むことができない文脈をもった物語が生成途中では存在していたことが判明した。とくに、従来西洋対東洋といった社会的、政治的な傾向が強い小説として捉えられてきた「旅愁」を、登場人物矢代と千鶴子の恋愛が描かれた小説と、して捉えることも可能にしている。「旅愁」草稿の翻刻の初公開によって、今後「旅愁」研究を進めていく上で、看過できない新局面を開く資料として重要なインパクトをもっている。この点は今後、日本近代文学館などに所蔵されている「旅愁」自筆資料の公開などによって、いっそう深め

られていくことが期待される。こうした資料がたくさん公にされることで、晩年の横光の生き方や思索について新しい知見が示されるであろう。

(2) 横光の新感覚派時代の小説「上海」を考察する上で重要な手帳を二冊翻刻した点も成果としては大きい。横光自身が上海を訪れたときの観察内容や感慨、思索などが記されている手帳は、横光の文学手法として、事実をどのように作品化していったかといった問題を提起している。これは事実のフィクション化と言ってもよく、小説「上海」というフィクションによって横光が実際の都市上海から見出す過程を考察する上で、重要な資料となるであろう。

(3) その他の小説では、「春園」の最初の題名が「尋常□(一字判読不可能)学校」であり、それが書き換えられて「結婚」となり、最終的に「春園」となったことは、この小説のテーマが結婚をめぐるものであることを考えると示唆的な書き換えと捉えられる。

(4) 「浪漫派 思ひ出」の翻刻は未発表小説の初公開となる。全集にも未収録である。内容的には「紋章」の先駆稿とも捉えることができ、「紋章」を考察していく上で、表現の可能性を追究し得る重要な資料であり、この翻刻資料を横光の創作史のなかでどのように位置づけていくかは今後の課題である。

(5) 評論・メモ類の資料に関しては、横光晩年のものを主としているため、第二次世界大戦の戦中戦後をどのように横光が感じ、考えてきたかを考察する第一級の資料であり、たんに雑纂として捉えてしまうことができない点では極めて貴重である。

(6) 書翰類に関しては、横光がヨーロッパ旅行をしながら、かの地から書き送ったものが主となる。これらの一部は「欧州紀行」にほぼ同一の内容で収録されている。直にヨーロッパの地を体験した生々しい感覚が表れた書翰の文章が、「欧州紀行」その他ヨーロッパを描く作品となっていることは、先述した「上海」同様、フィクションとしての小説を考察していく上で示唆的である。また千代夫人への思いは、書翰という資料からしか知り得ないものであり、家庭を大切にしたい横光利一という人物を考える上で興味深い。

(7) 本研究では、横光の自筆資料以外にも、補完されていた資料を翻刻した。その中には千代夫人による「洋燈」原稿の写しがある。「洋燈」は横光の絶筆であり、横光自身の「洋燈」自筆稿は大分県宇佐市が所蔵している。

それとの対比は今後の課題となるであろうが、千代夫人が「洋燈」を筆写していたことは、同じく千代夫人が横光の臨終を描いた「父の回想」とともに、横光への思いを雄弁に語っていると見ることができる。「父の回想」は初公開である。横光の臨終までの経緯が克明に描かれているため、重要な資料として翻刻し、公開した。

以上挙げた成果を踏まえた今後の展望としては、課題も含めて以下の点が考えられる。

(1)横光利一研究における生成論的な研究として寄与できた点は、その立ち後れている現状を考えても大きな成果である。横光の執筆過程を翻刻によって公開できたことで、横光作品を考察していくことが、活字だけ得られない視点から可能になっている。しかし、課題としては、翻刻という行為自体がすでに恣意的にならざるを得ない点が挙げられる。むしろ今回の翻刻ではその恣意性をできる限り排除するよう、加筆や訂正、抹消など、自筆資料の見たまの順番で活字化していった。そのため、文意が取りにくくなっている箇所が散見される。この是正は以下の点も含めて今後の課題である。

(2)文意がとりにくい事情は、翻刻記号の用い方にもあった。抹消箇所の中には、さらにすでに抹消されていた部分も重なっており、抹消の記号が二重にも三重にもなってしまう部分があり、結果翻刻資料を読みにくくしている。これについては加筆や訂正箇所でも同様である。これらをどのように記載していくかという問題については、今後横光研究において生成論研究が展開されていくなかで、統一されていくことが望ましい。翻刻の恣意性は確かに翻刻者の意向を反映してしまうが、しかし、例えば写真版などで公開するのは量的に困難であろうし、またそのままを伝えることは原資料でない限り不可能である。抹消箇所など、写真では判読が困難な場合が多い。

(3)本研究によって横光自筆資料の翻刻を公開したことで、三重県伊賀市や大分県宇佐市所蔵の資料、近代文学館所蔵資料などの公開が期待される。これらが続々と公開されれば、横光研究における生成論的な研究はますます充実していくと予測され、新しい横光利一像の形成や横光文学への斬新な視点の提起が果たされるであろう。

(4)最後に本研究で行ったデジタル機器を用いた方法について、以下のように考える。自筆資料のデジタル画像化についても考察し、よりよい撮影をしていく必要がある。デジ

タル撮影の利点は、タブレット機器などに取込んで閲覧する際、拡大して見ることができ点である。しかし、保存形式を jpeg などの圧縮形式にしてしまうと、詳細なペン運びなどが拡大した際に不明になってしまう。また、再生するディスプレイの解像度や色深度なども考慮する必要がある。8bit 出力のディスプレイでは抹消箇所などはただ黒くなってしまっており、原資料との隔たりは大きく、再現性において問題があった。こうしたデジタル機器の性能と文学資料とを合わせて追究することは、文化財を保存するという観点のみならず、大学等の講義において資料を十二分に活かすことにつながるであろう。貴重な原資料に触れることはたやすいことではないが、デジタル機器によっていわゆる本物を指向することができれば、活字のみの理解だけではなく、作家や文学作品への新しいアプローチが可能になるであろう。電子ブックが当たり前になりつつある現代において、教育的観点からも大いに意味があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計2件)

- ①井上明芳、横光利一自筆資料集—横光家・鶴岡市所蔵資料の翻刻と調査一、2013、213
- ②井上明芳、翰林書房、文学表象論・序説 小林秀雄・横光利一—文学言説の境界、2013、391

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 明芳 (INOUE AKIYOSHI)
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：90614264

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：